

「追儼の除目」追考：『苔の衣』補注

辛島，正雄
九州大学助教授

<https://doi.org/10.15017/8897>

出版情報：語文研究. 102, pp.13-19, 2006-12-15. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



「追儼の除目」追考

—『苔の衣』補注—

辛 島 正 雄

一 問題の所在

『苔の衣』は、いわゆる中世王朝物語のなかにあつて、愛別離苦のさまざまを歴史物語的手法で描き出しつつも、そこに、主人公による出家遁世譚と親子の恩愛譚とを加味することで、物語として一本背骨を通した感があるいつぼう、聖典たる『源氏・狭衣』との濃密なかかわりようも見て取れるなど、いかにもそれらしい特徴を備えた作品と目される。そのためか、同時期の物語のなかでは、作品論的研究にも比較的恵まれてるように思われるのだが、翻つて、研究の基盤をなすべき注釈的な研究となると、まとまつたものは、この物語の先駆的な研究を若き日にものされた、故今井源衛氏の手

になる『中世王朝物語全集7 苔の衣』（一九九六年、笠間書院）がひとつあるのみである。

この、今井氏によつて提供された校訂本文と訳注とによつて、研究者向けの翻字しかなかつた『苔の衣』は、一気に読みやすいものとなつたといえるのであるが、はじめての注釈書の宿命として、そこでの読みにさまざまな異論・反論が出てくるのも、避けられないことである。そうした「異論・反論」として、いちはやく迫徹朗氏が提起した問題のひとつを、本稿ではあらためて取り上げてみることにしたい。

迫氏は、今井氏による注釈書の刊行にあわせ、出版社の求めによつてであろうが、「中世王朝物語全集」の次の第四回配本の付録（『稗』一九九七年六月）に、「『苔の衣』 中世王朝物語全集7 を読む」という一文を寄せ、次のように述べて

「年中行事や儀式などの描写が粗末」な例に挙げられた「追儺の除目」の件につき私見を述べてみたい。夏の巻「一九」新年三月、夕月のもとに大納言夫妻琴の合奏の条に、

年も返りぬ。追儺に人々喜びし給ひて、右大臣、左大臣に上がり給ひて、内の大臣、右になり給ひぬ。

とあるが、「追儺云々」について「大晦日に除目があるのは不審」と注されているが、平安時代も末になると、追儺の行事が行なわれる大晦日には臨時の除目が催されるようになった。『平安時代史事典』によると、『中右記』の——辛島注——長治二年（一一〇五）十二月晦日条に、「追儺次、被_レ行_二小除目_一」とあるのが初見のようである。（二頁）

まことに的確な指摘であり、ここは追説により訂正されるべきであると思われるが、じつは『吾の衣』において、「追儺の除目」なるものは、この一箇所の解釈を改めれば片のつく問題というわけではないようなのである。

そもそも、今井氏が「追儺に人々喜びし給ひて」（二二〇頁以下、「中世王朝物語全集」本により、そのページ数を示す）との校訂本文を定めたことについては、「注」および「解題」を参照しておく必要がある。なぜなら、ここは、諸本（諸本については「解題」を参照）により、異同の見られる箇所だからである。すなわち、

「追儺に」は底本「つあかなに」（尊経閣文庫蔵本も同じ——辛島注）。内・浜「つあなに」、穂「つあかに」、盛「つあに」（龍門文庫蔵本も同じ——辛島注）。黒書き入れは「追儺」を当てるが、今、それに従う。ただし、大晦日に除目があるのは不審。「つあに」か。もしくは誤脱あるか。（注）（二一三頁）

あるいは、

夏巻々末に底本には、「つあかなに人々喜びし給ひて」とあり、内閣文庫本・浜口本には「つあなに」とあり、黒川本の書き入れには、「つあな」に「追儺」を当てる。

それによれば、大晦日に除目があったことになり、信じ
難い記述となる。(「解題」三三六頁)

せば、嘆きの中にも終しまに三位の中將になしきこえ給ひつ。
(二〇二頁)

とあるように、「追儼に」は、必ずしも安定的な本文とはいえないのである。筑波大学蔵本のように、「としもかへりぬ人々よろこひし給て」と、問題の本文そのものを欠くものもある。結果として、ここでの本文整理は妥当なものであったと判断されるのであるが、こうした本文のゆれが「苔の衣」

諸本にはあるのだということをしつかり頭においておく必要がある(なお、実践女子大学黒川文庫蔵本の書き入れに「追儼」とあるよであるが、確認できなかった。本文は「つひひな」とある)。

さて、冬の巻巻頭は、主人公である苔の衣の大将出家後、京に残された人々の動靜を描くことから始まるのだが、そこに、次のような記事がある。

年も代はりぬれば、拜礼なにくれと今めかしきことに
つけても、新しき年とも言はず降り落つる御涙隙なげな
り。「今はかひあるまじきことなれば、少將をだに大人
大人しきやうに見なして、世の中をも譲りつつ、いとか
ばかり憂かりける世を思ひ捨ててん」といそがはしう思

一読して、このまますんなりと理解できる文章であり、今井氏の訳注にも、特段のコメントもつかない。しかしながら、よくよく考えてみると、「嘆きの中にも終しまに三位の中將になしきこえ給ひつ」の「終しま」の文字は、いささか落ち着きを欠くのではあるまいか。

ここで少將から三位中將に昇進したのは、苔の衣の大将のひとり息子である。その祖父に当たる関白が、息子大将の突然の出家を悲嘆し、自らも出家するために、万機を孫に譲るうとして、その昇進を図ったというのである。その後、この孫は、秋の「直し物に中納言になり給ひ」(二〇六頁)、十六歳となった年には、「大納言になしきこえ給ひて、大将かけ給ひつ」(二〇八頁)と、とんとん拍子に出世、その翌年、祖父が念願の出家を果たすと、それにもなつて、弱冠十七歳という若さで、とうとう「関白の宣旨被り給ふ」(二三三頁)こととなる(以下、物語の最後まで、この地位にある)。思うに、「終しま」というのであれば、この「関白の宣旨」の時点こそが、それにふさわしいであろう。三位中將の地位など、次なるステップへの、ほんの通過点にすぎないのだから。

そこで、「終に」の前後の本文を諸本に当たってみると、じつに興味深い異同が見出される。既存の翻字本文では、穂久邇文庫蔵本を底本とした「古典文庫」本下巻に、

なげきの中にもつゐるに三位の中將になしきこえ給ひつ。
(一〇〇頁)

とあり、内閣文庫蔵本を底本とした「鎌倉時代物語集成」本にも、

なげきの中にもつ(除目力)ゐるに三位の中將になし聞え給ひつ。
(一二五頁)

とあって、いずれも「終に」のところは「追讎に」と読めるのである。よって、ここでも「追讎の除目」について述べているのだとすれば、「年も代はりぬれば」とある新年に先立つて、前年大晦日の「追讎」のうちに、少將の三位中將への昇進があったということ、すんなりと理解できるのである。

ちなみに、『日本国語大辞典』の「ついな〔追讎〕」の項には、「」「ついなめしのじもく(追讎召除目)」の略。「として、二つ目の用例に、右に掲げた「古典文庫」本の本文が

そのまま示されている(『同 第二版』にそのまま踏襲されるほか、『角川古語大辞典』での扱いも、ほぼ同様)。にもかかわらず、今井氏が「終に」の本文を立てたのは、底本とした伊達市開拓記念館蔵本に「ついに」とあるほか、同系統の尊経閣文庫蔵本や実践女子大学黒川文庫蔵本も「つひ(ひ)」に」となっているなど、本文的に安定していて、ことさらに底本改訂の必要を認めなかったからだと忖度される。それでも、同系統であるにもかかわらず、内閣文庫蔵本には「つゐるに」とあるわけであるし、穂久邇文庫蔵本の系統では、盛岡市中央公民館蔵本と龍門文庫蔵本にも「ついなに」とあり、揃って「追讎に」の読みを支持する以上、ここは、思い切った改訂の望まれる箇所ではなかったであろうか。

なお、「鎌倉時代物語集成」本には、「つゐるに(除目力)」との傍注が付されている。こちらは、新年に行われる春の除目(いわゆる眞召の除目)の誤りと解したものであるうか。

以上の検討を踏まえて見直すと、夏の巻、帝が西院の姫君の入内を望むくだりに、次のようにあるのが、問題となってくる。

内裏には隙なく責めわたり給へど、物の怪にわづらぶよしなど奏し給ひて、思し定めたることもなくて春にも

なりぬ。方々の御喜び隙なし。

なほあさましくつれなき大臣の心を上はめざましく思
すべし。御心懸け給へる姫君の兄、少将と聞こえし、つ
ひに中将になりたるが、いと誇りかに愛敬づき、なべて
の若き人にも紛はぬさまを御覧するもいと懐かしうて、
御前に召しつづ御物語せさせ給ふついでに、……（七四
頁）

西院の姫君の次兄である少将の昇進を、「つひに、中将になり
たる」と表現するのだが、ここでもやはり、「つひに」が落
ち着かない。ただし、この本文には「*」がついていて、
底本のままではないことが示してある。そこで、「校訂付記」
を見ると、底本表記は「つなに」であり（尊経閣文庫蔵本も同
じ）、それを「つひに」と改訂したこと、整定本文と一致す
る諸本には「内・穂・盛」のあることがわかる（二九九頁）。
より正確には、「内・穂・盛」の本文は「つぬに」であり、
ほかに筑波大学蔵本・龍門文庫蔵本も同じ本文をもつのだが、
ここも本来は、「つひ（ぬ）なに」とあるべき箇所なのであ
るまいか。先の冬の巻の例と見比べても、「年も代はりぬ
れば」あるいは「春にもなりぬ」とあって、年があらたまつ
た新年の話題として、「終（つひ）に」昇進した人物のこと

が出てくる、という共通点がある。そして、その片ほうで、
諸本を校合した結果、「追儼に」とすることで自然な理解が
得られるとすれば、もついつづも、諸本の異同からはただ
ちに導き出しえないものの、「つなに」と「つぬに」という
本文の対立は、いずれも「つぬに」からの誤脱によるもの
であるとも見られて、こちらもまた「追儼に」の誤りである
可能性は、少なくないと思うのである（なお、実践女子大学黒
川文庫蔵本では、「少将ときこえし中将になりたるか」の本文に補入
の印があつて、「つひに」と傍記する）。

さらに、疑いの目をもつて見てゆくと、春の巻巻頭近くの
次の一節も、気になってくる。

かくて除目になりぬ。権大納言の少将の君、中将にな
り給ふ。左大将殿の君達なども次第のままに上がり給ふ。
さまざまこのあたりの喜びどもいとめでたし。殿の上の
御兄の宮の中将と聞こえしも宰相になり給へり。隙なき
御いそぎどもに、はかなく年も暮れぬ。（一九頁）

この前には、十一月に、関白の姫君の袴着（不寄、裳着との混
同あるか）と、それにつづく東宮参りの様子が描かれていて、
その直後が、右の一文となる。これを、秋の除目（いわゆる

司召の除目」と見ることも可能だが、最初に検討した夏の巻の巻末の記事に、「追讎に人々喜びし給ひて、右大臣、左大臣に上がり給ひて、内の大臣、右になり給ひぬ」とあるのと照らし合わせても、「はかなく年も暮れぬ」との歳暮を思わせる記述からしても、これまた「追讎の除目」であつた可能性が、否定できないように思うのである。

三 まとめ

以上から、『苔の衣』には、都合四回にわたつて、「追讎の除目」が現れていたことになる。それらを整理すると、次の「ごとくである。

春の巻「六」＝「かくて除目になりぬ」。直後に「はかなく年も暮れぬ」とある。

夏の巻「二」＝「追讎に中將になりたる」。直前に「春にもなりぬ」とある。

夏の巻「一」＝「追讎に人々喜びし給ひて」。直前に「年も返りぬ」とある。

冬の巻「二」＝「追讎に三位の中將になしきこえ給ひつ」。直前に「年も代はりぬれば」とある。

なお、『苔の衣』における、「追讎の除目」以外の「除目」についても見ておけば、以下のとおりである。ひとつめは、春の巻に、

月日もはかなく過ぎて、秋の除目に関白殿の三位の中將、中納言に上がり給ふ。(五六頁)

とあり、中納言に昇進したのは、主人公の苔の衣の大将。直後に、「八月十日あまりの月つねよりも隈なくさし出でたる」夜、西院の姫君を垣間見て、心を奪われる場面が展開する。いまひとつは、夏の巻に、

除目にもなりぬれば、中納言数より外の大納言になり給ひぬ。(一一二頁)

とあるもの。こちらも「秋の除目」であり、権大納言に昇進したのは、同じく苔の衣の大将。西院の姫君とは結ばれて、このあと、「十月にもなりぬれば、御渡りのこと人知れず営み給ふ」(一一三頁)と、関白邸内に設けられた新居に姫君を迎え、二人が同居したことが記される。

そのほか、「直し物」が冬の巻に見えることは、先に触れ

た。また、『源氏物語』に七例ほど見られる、除目を意味する「司召」については、その用例を見出しがたい。

「追讎の除目」が、『苔の衣』に目立って多く現れるといえるのかどうかについては、他作品の詳しい調査を俟たねば、なんともいえない。いまは、迫氏の指摘を手がかりとして、『苔の衣』の読解をすすめるさいに、諸本の本文異同や、物語内部での表現のありように留意する必要があることなどを、今井氏の注釈作業をなぞるかたちで、いささか具体的に検討を試みたのである。

(からしま まさお・本学助教授)